

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	豊臣秀吉と文禄慶長の役
Author(s)	周, 暁紅
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1990 : 37 - 46
Issue Date	1991-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039282
Right	
Relation	



豊臣秀吉と文禄慶長の役

周 暁虹

一、豊臣秀吉という人について

1537年（天文六年）2月6日、豊臣秀吉は尾張国愛知郡中中村の自小作農弥右衛門の長男として生まれた。1543年（天文十二年）秀吉が七才のとき、父が戦場で受けた傷でなくなり、生計のため、母は筑阿弥と再婚した。八才のとき、秀吉が中村の光明寺に入って小僧になったが、いたずらがひどく寺を追い出された。その後、鍛冶師の弟子になったり、商家の子守をやったり、薪刈りをしたりして、各地を転々として、どこも長続きしなかった。仕方なく、また家へ戻ってきた。ところで、家で継父との折り合いが悪かったので、十五才のとき、母はこっそり秀吉に亡父が遺した永楽銭一貫文を渡し、「これで身を立てるように」と家を去らせることになった。ある偶然のチャンスで、那古野の城主織田信長に仕えることとなり、これが秀吉の一生にとって運命の別れ目となった。

秀吉は信長に仕えはじめたとき、身分が最下級の小人であった。しかし、秀吉がどんな仕事をするにもまじめに、一生懸命にやっていて、それに機智にとみ、ほかの人のやれない難しい仕事でも立派にやれたそれで信長に信頼され、小人から小人頭、足軽、足軽頭へと出世し、さらには足軽大将へと昇進していった。

1582年、本能寺の変で信長が部下の明智光秀に殺された。秀吉は運よくほかの諸將よりさきに信長の死を知ることとなり、果敢なる行動をとって光秀を破り、主君のため仇を討った。この事件で秀吉は信長の地位を受け継ぎ、主動権を手に収めることになった。

それから、秀吉が柴田勝家などの信長家の重臣を一々破り、織田信長の後継者としての地位を確立した。そして、織田信長が20カ国を平定したもとの、秀吉は光秀を破ってからわずか八年で、小田原城を陥落させ、後北条氏を滅ぼし、関東地方をことごとく手中に収め、さらに伊達政宗も降服した。これにより東北地方を平定し、最終的に日本全土を統一することができたのである。一世紀にわたる戦国時代は秀吉によって終止符を打たれたのであった。

二、開戦までの経緯

1、出兵した背景とその目的

明帝国が成立すると、東アジア世界の中心となった。その周辺諸国からは朝貢があり、それに対して冊封が行われていた。しかし、十五から十六世紀になると、朝貢貿易と海禁による明の冊封体制が緩み、倭寇の貿易が盛んになった。また、外交的に明帝国に従った室町幕府が日本の戦国動乱によって徹底的に滅ぼされた。さらに、ポルトガルをはじめと

(2)

する南蛮諸国の貿易船が東アジアに進出して、明が抑えていた東アジアの通交関係を大きく崩した。これによって、東アジアにおける中華の主としての明帝国の地位は低下した。秀吉による日本全国の統一がなされたのはこの時期であった。秀吉はこれまでの明帝国を東アジアの中心としては認めていなかった。その根拠として、彼は自分が太陽神の子であり、日本が神国であることを言い立てていた。だから、日本が世界を支配すべきだと彼は思っていたのだ。秀吉の野心はまず朝鮮を征服し、次に明帝国に進軍し、さらに南蛮、天竺までを手に入れ、東アジアの主になることであった。秀吉はまだ信長の部下として国内の統一戦争を推進したときに早くも対外侵略の想いがあったのである。彼がはじめてその胸をうちあけたのは1585年（天正十三年）関白になった直後である。古くからの家臣一柳末安に印判状を出した。そこに「秀吉、日本国自者不及申、唐国迄被仰付候心に候歟」という一文がみえる。つまり、「秀吉は日本ばかりでなく、やがては唐国まで切り従えるつもりだ」という意味である。

出兵する目的としては、まず「日明貿易再開論」があげられる。これは後の交渉条件から見られる。その中に「勘合を復して、官船、商船の往来をみとめること」がある。つまり、勘合貿易を復活することはその目的の一つである。次にあげられるのは「秀吉の名誉心、功利心」である。1586年（天正十四年）秀吉は耶蘇会宣教師がスパール・クエリュウらを大阪城に招き、「権威ある名を後世に残すため明を征服したい。そのためポルトガルの軍艦を手に入れたい」と言った。つまり、いままで日本人の誰もが成し遂げなかったことをして権威のある名を後世に残すため出兵するのである。その他の目的としては「領土拡張説」がある。秀吉は長年彼について戦ってきた部下に領土を与えたかったのであるが、日本は狭く、余った土地はあまりないので、海外に向けて領土を拡張するつもりであったという。のちの交渉条件の中に「朝鮮の四道と都を国王に返還すること」がある。占領土朝鮮八道のうち、四道と京城を朝鮮に返還して、残る四道は日本に属することである。これは明らかな領土問題である。最後にあげられる目的としては、秀吉がポルトガルの侵略と対決するため、日本統一を国際環境のもとで押し進める必要があり、そのことによって、秀吉自身は狭い日本の支配者としてのみふるまうことは許されなかったからである。以上のようないくつの目的の下に、秀吉は、侵略戦争を起こしたのであった。

2、朝鮮服属交渉

秀吉には、朝鮮国王も、中国皇帝も、西国の諸大名や毛利や島津や対馬の宗氏と何ら変わることなく、西へ西へ連なっているという意識があったので、朝鮮に対する要求は峇岐、対馬に対するものと全く同様のものであった。それに、朝鮮はすでに対馬の宗氏に服属したと思っていたから、自分に服属した宗氏を通じ、朝鮮に自分のもとに服属し、明征服の先導をするよう命じた。対馬には人口が少なく、良田もなく、穀物などは朝鮮に頼っていた。だから、朝鮮は対馬の属国どころか、朝鮮との貿易がなければ、対馬の生活がなりたない。こんな宗氏にとっては、秀吉の命令を忠実に朝鮮に伝え、今までにぎった交易

統制の権限がなくなってしまう、対馬の領主としての地位も維持できなくなる。しかも、これが実現するはずのないこともよくわかっていたのである。しかたなく、秀吉の命令を曲げて、家臣の袖谷康広を日本使節として、秀吉が日本の新国王になったので、親善の通信使を派遣して、その日本統一を祝賀してもらいたいと申し入れた。しかし、朝鮮側は秀吉が日本国王の地位を篡奪したものとみなして、それを拒否したのである。

翌1589年（天正十七年）、秀吉のもっと強硬な命令により、宗義智がみずから博多の僧景徹玄蘇、豪商島井宗室らとともに朝鮮に渡海した。彼らも袖谷のときと同じように、朝鮮国王の参洛について少しもふれなかった。ただ秀吉の日本統一を祝賀する通信使の派遣だけを要求した。その結果、黄允吉、金誠一らが通信使として天正十八年七月に来日した。十一月になって秀吉がようやく聚楽第で彼らを引見したとき、通信使が差し出した国書は彼の日本統一を祝賀し、かつこれより後両国の善隣友好を希望するという意を表したものである。秀吉は朝鮮がすでに臣服していると思い込んで、通信使に明征服の抱負を述べ、朝鮮に明征服の先導をするよう命じたので、通信使はおどろいた。

そのあと、宗義智はまた朝鮮に、秀吉の言っている意味は明に入りたいので、朝鮮の道を通してほしいと言うことだけだと説明し、あくまでも自分の立場を不利にしないようはからった。しかし、あとは朝鮮から仮道入明といえどもうけ入れることができないと断られた。

何も知らない秀吉は朝鮮が証明嚮導するものだと思い込み、肥前名護屋を明征服の基地として、その準備を着々と進めた。

三、第一次侵略戦争——文禄の役

1、上陸侵攻

文禄の役のとき、朝鮮に上陸した軍隊は次のような編成になっている：

第一軍、宗義智、小西行長、松浦鎮信、有馬晴信、大村喜前、五島純玄（18700人）

第二軍、加藤清正、鍋島直茂、相良長每（22800人）

第三軍、黒田長政、大友義統、（11000人）

第四軍、毛利吉成、島津義弘、高橋元種、秋月三郎、伊藤祐兵、島津豊久（14000人）

第五軍、福島正則、戸田勝隆、長宗我部元親、蜂須賀家政、生駒親正、来島通之、同通聡（21500人）

第六軍、小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂、高橋直次、筑柴広門（15700人）

第七軍、毛利輝元（30000人）

第八軍、宇喜多秀家（10000人）

第九軍、羽柴秀勝、細川忠興（11500人）

つまり、上陸軍は九軍編成、合計15万8千8百人にも達していた。

1592年（文禄元年）4月12日、宗義智と小西行長の率いる第一軍は釜山に上陸した。釜山

(4)

の守備軍の司令官僉使鄭撓はその時ちょうど絶影島に獵に出かけたところで、日本軍の上陸することを認め、あわてて城に帰った。ここで宗義智、小西行長は「仮道入明」の最後通牒を朝鮮側に示したが、もちろん、返事がなかった。もっとも、釜山城の一守將に国事に関する要求をしたとて、これはできない相談である。城でも国王に問い合わせる理由で、時間かせぎをした。第一軍はこれを口実として翌十三日の夜明けに釜山に総攻撃を開始した。朝鮮の兵士は勇敢に戦い、一般市民も防衛戦に参加した。戦闘は三時間ほど続いたが、釜山城はついに陥落した。守將鄭撓及び城内の一千人の兵士はほとんど戦死した。城内の市民は男女問わず、軍神の血祭りだと言って全部殺された。きわめて残酷であった。かくして、前後七年にわたる朝鮮侵略の幕が切って落とされた。

ついで翌日、第一軍はこの地方の中心、東萊府の攻撃に移った。朝鮮のこの水軍司令官朴泓も、司令官、慶尙左道兵馬節度使の李珀も城から逃走した。のこった文官、府吏宋象賢は東萊城を守って、勇敢に戦った。小西軍は「戦うなら相手になろう。戦わなければ道を通せ」と東萊府に木札を投げ込んだ。が、宋象賢は「死ぬのは簡単だが、道を通すのは難しい」と木札を投げ返した。日本の武官柳川調信がかつて宗義智にしたがって朝鮮へ使者としてきたとき、宋象賢は厚くもてなした。柳川調信は恩を忘れず、象賢を救い出そうとしたが、象賢は彼の好意を断り、城を守って戦死した。ついに東萊城が日本軍に陥された。

2、京城陥落と秀吉の大陸経略構想

小西行長軍が上陸を始めてから一週間のうちに、加藤清正の率いる第二軍、黒田長政の率いる第三軍も続々上陸し、容易に慶州と全海域を占領した。それから昌原城を攻略、靈山、昌寧、玄風を抜き、一路洛東沿岸を席卷して、京城をめざして北進した。

さて、釜山陥落後、京城の政府首脳はともかく都元帥——都巡辺使——防禦使——助防禦使というような非常時の軍制を取った。一見して整然たる組織が考えられていたが、肝心な兵はさっぱり揃わなかった。小役人、儒生の徒ばかり、戦闘に耐えられそうな者は一人もいなかった。

慶尙道を守るべき京城から派遣された巡辺使李鎰はこのような戦闘に耐えられないものを八、九百人集めて、日本軍と交戦したが、たちまち日本軍の鉄砲隊に蹴り散らされ死者が続出した。日本軍は城を包囲しようと迫ってきたとき、李鎰は一人馬に乗って逃げ、軍卒は皆討たれてしまった。

忠清道を守る都巡辺使申砮は日本軍と戦って戦死した。かくして、尙州も忠州も失った。これを聞いた朝鮮の国王は夜の黒闇の中であわてて平壤に逃げた。都は混乱状態におちいった。国王の都落ちを知った朝鮮の民衆は宮中に乱入し、奴婢の戸籍のある掌隷院に火を放ち、内帑庫にある金銀財宝を奪い去った。

こうして日本軍は容易に京城に入城した。慶尙道から忠清道、全羅道、京城にわたる朝鮮の南部地方はほぼ日本軍の占領に入った。

朝鮮の都漢城を占領した知らせを受けた秀吉は、異常な満足と過度の歓喜のために呆然自失した者ようになった。いままで抱く中国までも支配する夢がすぐに実現しそうに秀吉は思い込んだ。そして、同年五月十八日、関白秀次にあてて二十五ヶ条にわたる征服地の国割り方針を示した。その要点は：

- 1) 北京へ天皇を移すので、行幸の用意をせよ。北京のまわり十カ国は皇室領とする。公家象には今までの十倍ほどの知行を与える。(18条)
- 2) 明の関白は秀次とし、北京のまわりに百カ国を与える、日本の関白は羽柴秀保か宇喜多秀家としたい(19条)
- 3) 日本の天皇は後陽成天皇の皇子良仁親王か皇弟智仁親王としたい(20条)
- 4) 朝鮮は羽柴秀勝か宇喜多秀家に与え、九州は羽柴秀俊に与える(21条)

として、さらに軍備、兵糧についても詳細な指示を行い、秀吉自身はかつて日明貿易の要港であった華南の寧波に移るのだといった。

3、日本軍の占領政策と朝鮮義兵の決起

朝鮮の都漢城に入った日本軍は朝鮮八道を明征服の足場として固め、釜山から義州までの道筋を確保するために、「八道国割制」を發布した。それは慶尚道——毛利輝元、全羅道——小早川隆景、忠清道——福島正則、江原道——森吉成、京畿道——宇喜多秀家、黄海道——黒田長政、咸鏡道——加藤清正、平安道——小西行長、と、それぞれの率いる軍が配置されたのである。

占領した朝鮮の地では、日本の内地と全く同じ方式の行政を行うよう命令していた。朝鮮の各地に侵入した諸大名はまず朝鮮農民の支配を行った。彼らを農耕につかせ、兵糧米をとり、反抗するものを処罰するようにした。咸鏡道の場合、鍋島直茂は朝鮮農民を人質にとり、人質に引き換えに兵糧米を取った。また、占領地で日本語を普及する政策を施行した。強制的に朝鮮人に日本語を習わせた。

この侵略行為に対し、朝鮮農民は自衛のために義兵を組織した。慶尚道では郭再祐の率いる義兵があり、全羅道では高敬命の率いる義兵があり、さらに黄海道でも黄冊、鳳山、延安などで義兵の決起があった。日本の侵略が朝鮮奥地へ進むにつれ、義兵の決起は朝鮮全域に広まった。この義兵の決起のもつ大きな意味は、明の將軍李如松が救援にくるまえに展開されたものであり、明に対しても朝鮮民族の主体性をはっきり示したことにある。

義兵の決起と並んで、重要な活躍をしたのが李舜臣の率いる水軍である。朝鮮水軍は釜山から巨済島にいたる海域で、潮流を利用し、亀甲船を操り、火器を用いて日本水軍を撃破した。そして、日本軍の補給路を断つことになった。日本軍は兵糧不足におちいり、兵量の現地調達も義兵など朝鮮民衆の抵抗により難しくなってきた。要するに、李舜臣の率いる朝鮮水軍は日本軍に大打撃を与えた。

4、平壤の戦いと碧蹄館の戦い

尹斗寿と金命元が命を奉じて平壤の防衛任務にあたったが、小西軍が平壤を進攻すると、

(6)

尹、金はあわてて平壤を放棄して、北へ撤退した。翌日、この城は無血占領された。これに先立ち、朝鮮国王は鴨緑江のほとり義州まで逃げた。国王が平壤を逃げたあと、これも漢城の場合と同じように、民衆が城内にだれ込み、穀倉を襲って米を奪い合った。

さて、日本軍が漢城を占領した後、朝鮮の廷臣たちは明廷に請援するか否かについて論議したが、最後に宣祖李松の支持に下で請援使を派遣して請援した。当時、明廷にも出兵するか否かについて意見が紛々とし、一つにまとまらなかった。廷議のすえ、出兵すべきであるとの結論に達した。

すると、明の將軍祖承訓は約三万の兵を率いて鴨緑江を渡った。そしてただちに平壤を攻撃した。城内の道は狭く、明軍の騎兵であるから市街戦には不利である。屋内に掩蔽している日本軍は鳥銃を撃ち、明軍は反撃することもできない。遂に大敗を喫した。副將の史儒は弾丸にあたって戦死、祖承訓は落胆して兵を退いた。

翌1593年（文禄二年）正月、祖承訓が前年七月平壤の戦いの惨敗した恥を雪ごうという決意を抱いて、將軍李如松は鴨緑江を渡って平壤を迫った。この時、日本軍が平壤で奪った兵糧はすでに底をついた。そして、その兵糧米を日本から調達すれば、李舜臣の水軍に阻まれ、その輸送はきわめて困難であった。こんな状態で戦うと、日本軍の敗北は必至である。約5万の兵に囲まれた小西軍は戦うこと数日、兵糧はなくなり、武器弾薬も尽きてしまった。小西軍は漢城に向かって撤退した。

李如松は余勢を駆って、日本軍の拠点となっている漢城に向けて南下した。これに対し、日本軍は漢城の北方約四十キロの地点にある碧蹄館で明軍を迎撃した。碧蹄館は南北に長い溪谷であり、包囲作戦はとられない。日本軍は細長くなった明軍に一点突破の奇襲を用いて明軍を蹴散らした。李如松はこの敗北にすっかり意気をくじかれて、柳成竜の建言も聞き入れず、平壤に戻った。

日本軍はもはや兵糧、弾薬の不足、兵の疲労、都の三里郊外まで「一揆」のものが出沒するという安全確保上の不安などがあり、碧蹄館の合戦で勝つと、平壤の戦いで日本軍が軍事的劣勢におちいったのを盛り返し、日明間に軍事的均衡をもたらしたから、これを契機として日本と明との間に講和交渉が本格的にすすめられた。

四、日明講和とその破綻

明の軍務経略宋応昌は策略を企て、その幕下の策士である謝用梓、徐一貫にそれぞれ參將と遊撃將の肩書を与え、二人を明皇帝からの講和使と詐称して日本に遣わした。日本軍はこの二人を正式の明使節と思い込み、石田三成の案内により、同年五月十五日、肥前名護屋に着いた。秀吉は講和条件七ヶ条を「明使節」に示した。和議条件は、

- 1) 明帝の女を迎えて、日本の后妃とすること
- 2) 勘合を復して、官船、商船の往来をみとめること
- 3) 日、明両国大臣が誓詞を交換すること

- 4) 朝鮮の四道と都を国王に返還すること
 - 5) 朝鮮から、王子と大臣を人質にすること
 - 6) 去年とられた朝鮮の二王子は、沈惟敬にわたして帰国させること
 - 7) 朝鮮の重臣たちに、代々日本のそむかぬことを誓約させること
- というものであった。

謝用梓らはこの条件を聞き入れ、翌日、名護屋を離れて明皇帝に報告しに帰った。

さて、謝用梓ら「明使節」が名護屋に留まっていたころ、朝鮮では小西行長と沈惟敬の画策がはたらいていた。彼は行長の家臣内藤如安を偽りの講和使節に仕立て、偽作した秀吉の「降表」を持たせて明皇帝のもとへ派遣した。彼らは秀吉が示した七カ条を「秀吉は日本統一して新たな国王となったので、明から国王の地位を認めてもらい、あわせて勘合貿易も行いたいのだ」とすりかえた。これを聞いた明は「秀吉を日本国王として認めてやるが、明に貢物を持ってくる必要はない」といって冊封使を日本に遣わすことにした。こうして、約三年にわたる交渉の結果は「特に爾を封じて日本国王と為す」という顛末にいたった。七カ条の講和条項がまったく問題されなかったことを知った秀吉は激怒して、ふたたび朝鮮に兵を出す準備にかかり、第二次朝鮮侵略をひき起こす。

五、第二次侵略戦争——慶長の役

1597年（慶長二年）2月、秀吉は第二次朝鮮侵略戦争を引き起こした。このたびの戦争の目的は明征服ではなくて、実力で朝鮮南四道を奪うことであった。というのは、十数万にのぼる日本の武士を動員した以上、彼らに恩賞を与えなくてはならない。そのたびには講和条件に示した朝鮮南四道の領土を是非ともとらなくてはならないからである。

戦いは全羅道に通じる慶尚道の巨済島ではじまった。朝鮮の水軍の主将はもともと李舜臣であったが、元鈞は李舜臣の出世を妬んで、李舜臣を失脚させ、自分が水軍統制使となった。しかし、元鈞は水軍を統制する経験もほとんどないし、軍紀もひどく緩したので、巨済島の戦いで日本軍に打ち破れられた。元鈞自身も戦死した。こうして、李舜臣が長年にわたって築き上げた閑山島の鉄壁は、一朝にして水泡に帰した。このあと、日本軍は全羅道の軍事的拠点である南原城に迫った。南原城には明の將軍楊元が率いる明軍三千人と全羅兵使李福勇が率いる朝鮮軍一千人しかなかったが、日本軍は総勢五万人にもものぼった。守備兵は勇ましく防戦したが、結局落城し、楊元は逃走した。

南原城攻略のあと、日本側は慶尚道蔚山に浅野幸長と加藤清正が陣を構えた。慶長二年十二月、明と朝鮮の連合軍が押し寄せたとき、蔚山城はまだ築造中であった。だから防禦態勢が整わない。明と朝鮮軍は蔚山城の水道を断ち、城内の日本軍は兵糧も水も尽いた。翌年正月、黒田、蜂須賀の救援隊が駆けつけ、明と朝鮮軍の包囲軍を背後から攻めたので、ようやく籠城は終わった。慶長の役において、このような戦いはまだたくさんあるが、ここで一一述らない。ようするに、慶長の役に放火、虐殺がいたるところに行われた。残虐

(8)

行為を極めた。有名なのは「鼻切り」である。秀吉の命令によって、諸大名が家臣に戦功の証として鼻切りを強制した。切りとった朝鮮人の鼻は塩漬けにして樽につめ、秀吉のもとに送られた。秀吉は東山方広寺の近くに塚を築いてこれを埋めた。その目的は、自分の武勲を世の人々に示し、同時に自分に反抗する者がいかに恐ろしい目に合うかを見せつけるということであった。

この戦争を通じて数万人の朝鮮人捕虜が日本に連れ去られた。このうち農民は日本の農村で農耕の補助労働力として耕作を強制された。また、縫官の女といわれた刺繍の技術者は秀吉のもとにあつめられ、陶工は西国大名のもとに連れてこられた。

連行された捕虜の中には朱子学者もいた。その一人、姜沆は南原城の戦いのあと捕まえられ、伊予（愛媛県）の天津に連れられ、やがて藤原惺窩とめぐり合った。藤原惺窩は姜沆から朱子学を政治に応用する方法を学んだ。姜沆と藤原惺窩は秀吉の朝鮮侵略や日本の厳しい封建領主制への批判をも語り合ったという。

1598年（慶長三年）8月18日、秀吉が死んだ。その死はもちろん秘密にされ、徳川家康らは朝鮮にいる大名たちに撤退の指令を出した。

釜山や蔚山にいた日本軍は撤退したあと、小西軍は順天を去ろうとしたとき、元鈞に代わって再び水軍の主将となった李舜臣はこれを追撃した。島津軍は小西軍を救うため、露梁津で李舜臣の水軍と戦った。李舜臣はこの海戦で銃弾にあたって戦死した。島津軍は小西軍を救い日本への撤退を成功させた。これを最後として、七年にわたる朝鮮戦争は終わった。

六、影響と評価

この七年にわたる侵略戦争は各参戦国に巨大な損害と重大な結果をもたらした。そのうち、最大の被害を蒙ったのは、全土が戦火に見舞われた朝鮮とその民衆であった。開戦したとき、朝鮮の全兵力は十七万人であったが、1598年は二万五千人しかのこらなかった。その損失はいかに大きかったかは窺える。一般民衆の中で大量殺戮行為や捕虜連行などに人口が激減したため、兄妹結婚という事態まで起こったと言う。そして、「壬辰の悪夢」として秀吉の朝鮮侵略が語り伝えられ、それが朝鮮の民族意識の中に定着した。

明国も朝鮮援助のため、膨大な人力、物力、財力を消耗した。前後して朝鮮戦場に繰り出した二十二万余りの大軍のうち何万人もの人力を失い、費やした銀は約一千万両以上に達し、朝鮮に運び込んだ兵糧も極めて多く、記録されたものでも六十七万五千石に達した。明は七年にわたる日本との戦いで、著しく疲弊し、そして、国内の農民反乱と東北に勃興しつつあった女真族の山海関進出に滅亡された。

日本においては、出兵の目的を達せず、出征軍の三分の一にも達する損害と推定される十万余りの多数の将兵と膨大な軍需物質の損失は国内の経済をも破壊する結果となった。

さて、秀吉が戦争を起こした目的は朝鮮、明ないし東アジアを征服し、支配することで

あったが、結局、戦争で自分の実力が頗る消耗された。しかし、徳川家康はこの戦争のため一兵一卒も朝鮮に出せなかったから、何の被害も受けず、日本国内における最大の勝利者となった。この秀吉による戦争は結局家康のための戦争となってしまった。それで、日本国内の支配権も家康の手に渡った。一方、中国でもまもなく明が滅びたが、新しく中国の支配者になったのは秀吉ではなく、同じ周辺民族の女真族であった。秀吉はこの戦争で何の利益も得られなかったどころか、秀吉政権が滅びる原因となり、秀吉自身も命をちぢめたのであった。

この文禄、慶長の役の評価について、朝鮮側は一貫して非道な戦争として認識し、秀吉を国の不具戴天の讐として憎んで来た。日本では時代背景によって評価も違う。江戸時代は徳川氏の時代であり、平和的な外交を行っていたから、秀吉の朝鮮の役に対して一般に非難を浴びせた。しかし、幕末から近代に入って、日本は大陸侵略を国策の根本とするにしたいが、朝鮮侵略も「廣愨の師」、「正義の戦い」、ひいては「聖戦」と崇められ、秀吉を「万世不朽」の英雄とされた。1945年の敗戦後、日本の論者には、朝鮮役は秀吉の野望による侵略の戦争であり、日本人が過去犯した戦争の罪悪であるとみる傾向が一般的になっている。今は日本を含む世界のほとんどの国は平和を望み、全世界の平和の実現に努力しているから、文禄、慶長の役についての認識も戦後のように批判的に見ていくであろう。

七、終わりに

文禄、慶長の役は日本、朝鮮、中国の三国に及ぼし大規模な戦争であり、この戦争の各段階を正確的に把握することは困難である。おまけに、私の日本語も不十分で、歴史についての研究方法もしっかり学んでいないので、わたしにとってこのテーマはさらに難しいものとなった。それをよく知りながら、私はやはり勇気を出して書いてみた。説明不足ないし間違いが多くあることと思うが、今後さらに研究を進めて直していきたいと思う。

小文を作るにあたって使用した参考書は以下の通りである。ここで併せて感謝の意を表したい。

参考文献

- | | | |
|-----------------------|--------------|--------------|
| 1) 織豊政権と東アジア | 張玉祥 | 六興出版 '1989 |
| 2) 空虚なる出兵——秀吉の文禄、慶長の役 | 山垣外憲一 | 福武ブックス '1989 |
| 3) 日本史の謎と発見 9 信長と秀吉 | 内藤昌など | 毎日新聞社 |
| 4) 秀吉と文禄の役 | 松田毅一 川崎桃太郎編訳 | 中公新書 '1974 |

(10)

- | | | |
|-------------------------|------------|--------------|
| 5) 豊臣秀吉 | 小和田哲男 | 中公新書 '1985 |
| 6) 日本歴史 6 織豊政権 | 藤木久志 北島万次編 | 有精堂 |
| 7) 壬辰倭乱の発端と日本の仮道入明交渉 | 中村栄孝 | 朝鮮学報第70期 |
| 8) 壬辰、丁酉役におけるいわゆる降倭について | 内藤雋輔 | 朝鮮学報第37、38期 |
| 9) 世界歴史と国際交流——東アジアと日本 | 田中健夫 | 放送大学教材 '1989 |